

2021 年 9 月 12 日

主日礼拝

《礼拝》

礼拝讃美歌⇒4 番（旧 7 番）

『アバ父と神を』

聖書⇒ガラテヤの信徒への手紙 2:20~21 節

『生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。』

礼拝讃美歌⇒355 番（旧 304 番）

『主はいのちを』

聖書⇒ルカによる福音書 15:11~24:章

『また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。』

礼拝讃美歌⇒6 番（旧 8 番）

『遙かに迷いし』

《パン裂き》

聖書⇒コリントの信徒への手紙一 11:23~26 節

『わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。』

礼拝讃美歌⇒145 番（旧 60 番）

『主イエスよわれらは』

《建徳》

聖書⇒創世記 45:24~28 節

『いよいよ兄弟たちを送り出すとき、出発にあたってヨセフは、「途中で、争わないでください」と言った。兄弟たちはエジプトからカナン地方へ上って行き、父ヤコブのもとへ帰ると、直ちに報告した。「ヨセフがまだ生きています。しかも、エジプト全国を治める者になっています。」父は気が遠くなった。彼らの言うことが信じられなかったのである。彼らはヨセフが話したとおりのことを、残らず父に語り、ヨセフが父を乗せるために遣わした馬車を見せた。父ヤコブは元気を取り戻した。イスラエルは言った。「よかった。息子ヨセフがまだ生きていたとは。わたしは行こう。死ぬ前に、どうしても会いたい。』

聖書⇒創世記 46:1~8 節

『イスラエルは、一家を挙げて旅立った。そして、ベエル・シェバに着くと、父イサクの神にいけにえをささげた。その夜、幻の中で神がイスラエルに、「ヤコブ、ヤコブ」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、神は言われた。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトへ下ることを恐れてはならない。わたしはあなたをそこで大いなる国民にする。わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す。ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう。」ヤコブはベエル・シェバを出発した。イスラエルの息子たちは、ファラオが遣わした馬車に父ヤコブと子供や妻たちを乗せた。ヤコブとその子孫は皆、カナン地方で得た家畜や財産を携えてエジプトへ向かった。こうしてヤコブは、息子や孫、娘や孫娘など、子孫を皆連れてエジプトへ行った。』

聖書⇒創世記 46:28~30 節

『ヤコブは、ヨセフをゴシェンに連れて来るために、ユダを一足先にヨセフのところへ遣わした。そし

て一行はゴシェンの地に到着した。ヨセフは車を用意させると、父イスラエルに会いにゴシェンへやって来た。ヨセフは父を見るやいなや、父の首に抱きつき、その首にすがったまま、しばらく泣き続けた。イスラエルはヨセフに言った。「わたしはもう死んでもよい。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから。」』

礼拝讃美歌⇒127 番（旧 211 番）

『十字架の許ぞ』

《建徳要旨》

「涙の抱擁」

創世記 45 章 24～28 節、46 章 1～7 節、28～30 節：10 人の兄たちは 22 年前、ヨセフは野獣に噛み殺されたとウソをつき、血の付いたヨセフの服を見せました。父はだまされたが、ヤコブ自身、父イサクをだましている。自分がしたように息子からされる。それは昔も今も同じ。ヨセフが活着しているのなら、何としても会いたい、とヤコブは強く願いました。そして、一族全員でエジプトに移住する一大決心をしました。エジプトに下る途中のベエル・シェバで、ヤコブは神を礼拝し、約束の言葉を与えられます。こうして 22 年ぶりに、父ヤコブと息子ヨセフは再会し、涙の抱擁をします。一族だけでなく、ファラオの高官たちも見た。そして、共に涙した。もう死んでも良い、とヤコブは言った。10 人の兄たちは、犯した過去の罪を思いつつも救われる思い。ヨセフは老いた父を見て、涙が止まらない。父はただもう嬉しくて泣いている。19 年前の 10 月、北朝鮮に拉致された 5 人が日本に帰り、親たちと抱き合った。涙の抱擁を私たちはテレビで見ました。すべての拉致被害者が、家族と再会できる日を切に祈ります。さて、ヤコブはこの時 130 歳。それからの余生 17 年は本当に幸いでした。聖書は私たちに約束します。苦しみや大変な事が多々あったとしても、神は最後には一番良い日々を与えてくださる、と。最後にルカ 15 章 11～24 節。主イエスが語られた放蕩息子の父は、帰って来た息子を抱きしめながら、父ヤコブの心境だったに違いない。「この子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。皆、一緒に喜んでくれ」と言った。放蕩息子とヨセフは真逆ですが、主イエスはヨセフ物語を踏まえて、この譬話をされたことが分かりました。そして、愚かで罪深い私でも、主の十字架ゆえに父神に抱きしめられ、喜ばれていることを知らされ、感謝するばかりです。